

Kappa Novels



お願い――

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけます。ありがとうございました。なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三

(郵便番号112)

光文社 出版局

長編推理小説 女 相 続 人

昭和49年4月25日 初版発行
昭和55年5月4日 20刷発行

定価600円

著 者 草 野 唯 雄
川崎市高津区新作1662
発行者 小 林 武 彦
印刷者 堀 内 文 治 郎
東京都千代田区三崎町2-18-11
堀 内 印 刷

発行所 東京都文京区音羽2 株式会社 光 文 社
振替東京115347 電話 東京 (942) 2241 (代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替いたします。 (関川製本)
表紙の模様・意匠登録 116613 © Tadao Sōno 1974

(分)0-2-93(製)02248(出)2271 (0)

以 朝 正 堂 刊 下ろし

おんな そう ぞく にん
女相続人

そう の ただ お
草野唯雄



カッパ・ノヘルス

目次

一章	米子 よなご の女
二章	遺言書
三章	渦 うず まく策謀
四章	大崩壊
五章	大量殺人
六章	鳥の血
七章	岩屋 いわや 洞穴 どうけつ
八章	全員抹殺 まっさつ
九章	捜査の限界

229	187	148	118	90	65	45	19	5
-----	-----	-----	-----	----	----	----	----	---

本文のイラストレーション

澤田 弘

一章 米子の女

1

日が暮れてから、毛利寛は浴衣に下駄ばきという格好で、ふらりと宿を出た。

財布は懷に押しこんでいる。いっばいひっかけるのと、そのついでに靴ずれに貼る絆創膏を買ってくるのが目的だった。

この米子市のはずれにある皆生温泉は、旅館やみやげ物店のほかにトルコやストリップ小屋のやたらと多いところで、安っぽいネオンや電飾が町中を派手にいろいろっているのだが、そのわりには人通りがなく、通りはガランとしていた。初夏の、しかもウィークデーのせいであらう。

美保湾から吹いてくる涼しい海風を背に受けながら、下駄の音をカラコロとひびかせながら歩く。ついでのはうを先に済まそうとしたが、町に二軒しかない薬店の一

つはシャッターをおろし、もう一つは明かりがついたままで表のガラス戸に鍵がかかっていた。隣りのタバコ屋に聞くと、ちょっと出かけたらしいが、まもなく帰ってくるでしようという。

そこで前から目をつけていた一軒の赤ちょうちんへ向かった。うっかりすると見のがすくらいの小さな店構えで、通りに面した薄暗い陳列窓には、なべやき、酢だこ、オムレツといったたぐいの料理見本が並べてある。それを見るからに古びて、埃にまみれているのがわびしい感じだった。それでも、「一茶」というしゃれた名がついて、入口には打水してきちんと盛塩がしてある。

ケバケバしいだけの安手のバーよりはましな店だと思いながら、たてつけの悪い、くもりガラスの戸をあけて入った。誰もいない。古びたガタガタのテーブルと椅子が二組。あとは四人がけくらいのカウンター。カウンターののはしにピンク電話、後ろには冷蔵庫。棚には酒、ウイスキー、ビールが少しずつ並んで、その間にお定まりの招き猫が納まっている。

壁に貼られたビールのポスターも、ひと昔前のものらしい。

「おい。お客さんだよー」

毛利が遠慮なく大声をあげて自分のことをしらせると、奥の料理場とカウンターの境ののれんをはねて、女が顔を出した。

「はあ、どうも……。おいでなさいませ」

「ひまらしいね」

といいながら座ぶとん付きのとまり木に腰をおろす。

「はい。やっぱし士、日になりませんとなー」

「ちょっと薬を買いに出たんだが、店をあげたままどつかへいっとるらしいんだ。帰ってくるのをぼんやり待ってるよりはと思つてね。一本つけてくれるかね」

「お酒ですね。一級と二級とどっちにしますか？」

「一級がいいね」

「はいはい。おさかなは？」

「めし食ったあとだから、何か軽いものがないな」

「オムレツはどうですか」

「オムレツはおれの一番嫌いな食べ物さ。冷や奴はない

かね」

「は？」

「やっこ。豆腐だよ、豆腐」

「ああ、とうふですか。一丁ならありますが」

「一丁あれば十分だよ。それにしてくれ」

注文を終わって煙草を出すと、女が赤いマニキュアの指でサッとマツチをすってくれた。煙を吐きながら、酒肴の仕度にとりかかった女に、さりげない観察の目を走らせる。色が白く、目が大きくて、そう捨てた器量ではない。だが、誇張しすぎた引き眉毛や、真っ赤に塗らされた唇、大きなアップの髪型などはいかにも安っぽかった。場末の小さな飲み屋にふさわしい女だ。若く作ってはいるが、もう三十には手の届いている年であろう。

「お客さん。薬買いにというと、なんの病気ですか？」

酒を移した徳利を銅壺に沈めながら、女が聞いた。

「いや、病気じゃない、靴ずれだよ。だから絆創膏でも買おうと思つてね」

「ああ、それやつたらうちにありますから、それ使わっしゃりゃいいですが」

「そうかね。じゃそれをもろうことにして、ゆっくり腰をおちつけるか」

「はあ、どうぞごゆっくり」

ほかに客がいないのもいいし、それにもともと酒には目のないほうである。

「お客さん。宿はなぎさ園ですなー」

豆腐を切って皿に盛り、それにおろししょうがを添え

ながら女がいった。

「ほう。よくわかるね」

べつにおかしいことでもないのに、女は甲高い声で笑った。笑うともっと品の悪い感じになる。

「浴衣の柄ですよ」

「ああ、なるほど」

「ついにご商売のほうも当ててみましょうか」

「それはちょっと無理だろうな」

「絵かきの先生、でしょうが」

「えーっ！ こいつは驚いた。しかし、いったいどこで？」

といいながら、思わず自分の掌をひろげて見る。だが、むろん絵の具なんかはついていない。

「やですよ、お客さん。まさかそこまで見破る眼力はないですよ。なぎさ園の女中さんに、知り合いがいますよ。せまい温泉町ですけん、ちょっと長逗留のお客さんの話はすぐ耳に入るんですよ」

「なんだ、そんなことだったのか……」

料理ができて、お燗もついた。酌をしてもらって、毛利は飲みはじめた。

「で、おれのこと、どんなふうに聞いている？」

「東京の絵かきさんで、名前は毛利さん。ここへは絵を描きにおいでになった。インタービューっていうんですか、着いてすぐ、山陰日報の美術部の記者さんが、記事とりにきたくらいじゃから、きっと有名な先生にちがわん……」

「少し買いかぶりすぎだね。それほど有名じゃない。まあまああってとこさ。新聞社には知人がいるんで、東京から連絡してもらった。なにかと便宜をはかってもらえるからね」

「東京から車でおいでになったんですか？」

「うん。途中で二泊してね」

「一日おきくらいに、車でおいでになるそうですが、どこを描いたりんさるの？」

「島根半島の多古鼻付近だよ」

「へえー、そらあ懐かしいな。うちの出身地ですわ。でも先生、あれはたこじゃのうてたごいうんですよ」

「たごか……。もっともおれが描いているのは、そのたごのそばの沖泊という漁村だがね」

「そ、その沖泊なんです。うちが育ったところは」

女は目をまるくして、せきこんだ。

「そうかい。そいつは奇縁だ。世の中広いようでも狭い

ね」

「ほんとにね」

「画面構成は」毛利は目を上げて、「海につき出た半島最先端の岬だ。木と段々畑と、そして大地にしがみつくようにして点在している藁ぶきの農家が四、五軒。その向こうに岩礁に砕ける日本海の波濤という構図でね」

「へえー？　じゃ、ひょっとするとその藁ぶきの家が、うちの……」

「おやおや。するときみの両親かだけれが」

「いいえ、とうの昔に親たちは死んで、その家はもう人手に渡っちやります。いまは網なんかを入れとく小屋に使われとるようですが……」

「そうかい。なるほどそういえば、人が住んでいるようには見えなかったな。もっともそばまで行ったらわけじゃないが」

「先生、わたしにその絵を一度、見せてくださいませんか」

「ああ、見せてあげよう。まだ描きかけだが」

「すみません」

それから話はずんだ。またたくまに燭瓶が五、六本倒れ、さしつさされつする盃で女の顔が桜色に染まっ

たころは、彼女の名が高畑ゆりで、亭主も子もない気楽なひとり者。ここの雇われマダムであることもわかった。店の持ち主は米子市灘町の人だという。

「そうか……。きみの名はゆりさんか……」

毛利が少しロレッツの怪しくなった口調でいう。

「おれ、今夜ほど気持ちよく酔ったことは近来にないよ。どうだい、今夜はこの店を、おれの買いきりということにして、しめてしまわないか。これくらいで足りるだろう？」

と、一万円札を二枚出してカウンターの上に置くと、ゆりが例の甲高い声で笑った。

「先生」

ちよつと顎をひき、色っぽい目つきで毛利を睨むようにして、

「いやじゃなし、そげなことしたら。店はしめますよ、どうせ今夜はひまですけん。お勘定はきまりどおりにいただければいいです」

と、立っていつて表戸に錠をかけ、幕をひく。それから店の電灯を消して、カウンターの上の明かりだけにした。

「こうなったら、何も店で飲まなくてもいいだろう。奥

の部屋はないのか？」

毛利が聞いた。

店つづきに四畳半の小部屋がついていた。そこに小さなチャブ台を据えて、酒盛りを移した。

「ゆりさん。あんた、ひとりもんだなんていつてるが、突然ご亭主が現われて、これは、なんの真似だ、なんてことはないだろうね」

「そりゃ先生。うちもこげな年ですけん、いままでずっとひとり身じゃったなんてことはいいませんよ。沖泊の漁師の家で大きゅうなつて、両親が死ぬと米子に働きに出ました。そこで男と連れ添うて、いつときは大根島にも住んだんですが、しゅうとが性悪女で、いびられづめでした。いや——こげなお婆ちゃんばあの身の上話なんぞ、聞くのいやでしよう？」

「いやなもんか。聞かしてくれよ」

「それでこらえきれんと男と別れてとび出して、それからあっちこっちとバーや飲み屋づとめ。そのうちこの店をまかされることになったとですよ。え？　ここの主人？　いいえ、それはもう絶対色気抜きの雇傭契約。もうええ年したじいさんですから」ゆりはとろんとした目を据えて、「それより毛利さん。あなたこそ東京にはき

れいな奥さんが待つとりんさるのところがいますか」

「ぼくはね、三十五まで嫁さんはもらわない主義なんだ。いま三十三だからね、まだあと二年は独身生活を楽しめる勘定だよ」

「さあ？　当てにしてええのかな——、そんな話……、人に欺されやすいんが、うちの悪いくせでしてな。好いたらしい男衆に出逢うと、すぐころっとひと目惚れしてしまふんですわ。いままでもそれでしょっちゅうしくじってきました」

「じゃ、ついでにもう一度しくじってみるんだね。いいじゃないか、お互いにもう大人なんだ。自分の責任は、自分でとれば……」

「ほーんと、先生に惚れてもええんですか？」

「これは驚いた。前もって断わられたのは、はじめてだよ」

「そうですか。ではお言葉に甘えて、旅のお方のひと夜の情けに、しつぱりぬれてみることにしましょうか」

また、けたたましく笑った。

「にくいことをいうね。ぼくは感激したぞ」

そういいながらチャブ台を押しつけ、ゆりの肩に手をかけてひきよせると、でれでれと毛利の膝にくずれてき

た。

そのまま横抱きにして唇を合わせる。安香水のかおりが鼻をつく。横ずわりになった膝の、白っぽい京がすりの裾が割れて、小柄な体ながら肉づきのよいふともみが覗く。

毛利の手が、ゆりの帯をときにかかる、彼女は腰をねじるようにして、

「せんせい……でんきを……」

「いいよ、このままで」毛利は立ち上がろうとするゆりをやんわりと押し伏せた。「きみほどの美人を抱くの、明かりを消してはもったいないじゃないか……」

と、齒のうくようなお世辞をいう。

着やせするたちなのであろう、ゆりの体は、外見よりずっと肉がついていて、ことに双の乳房は、アンバランスを感じさせるくらい豊満だった。だが、もっと毛利を驚かしたのはゆりの下腹部だった。そこは、まるでジャングルのようにおびただしい剛毛が密生していて、野生動物的な生臭さを発散していた。彼女の全身のすみずみにまで、精密検査でもするかなような、毛利の執拗な愛撫がくりかえされた。

2

皆生温泉町の三条通りが海岸防波堤につき当たるあたりは、小さな砂州になって、それをとりかこむようにテトラポットを積みめぐらしてある。潮が満ちてくると、そのために勢いを殺がれた日本海の波が、おだやかに砂州に寄せてきては、ものういささやきをくりかえす。

夜もふけて、星明かりだけの浜は暗く静かだった。

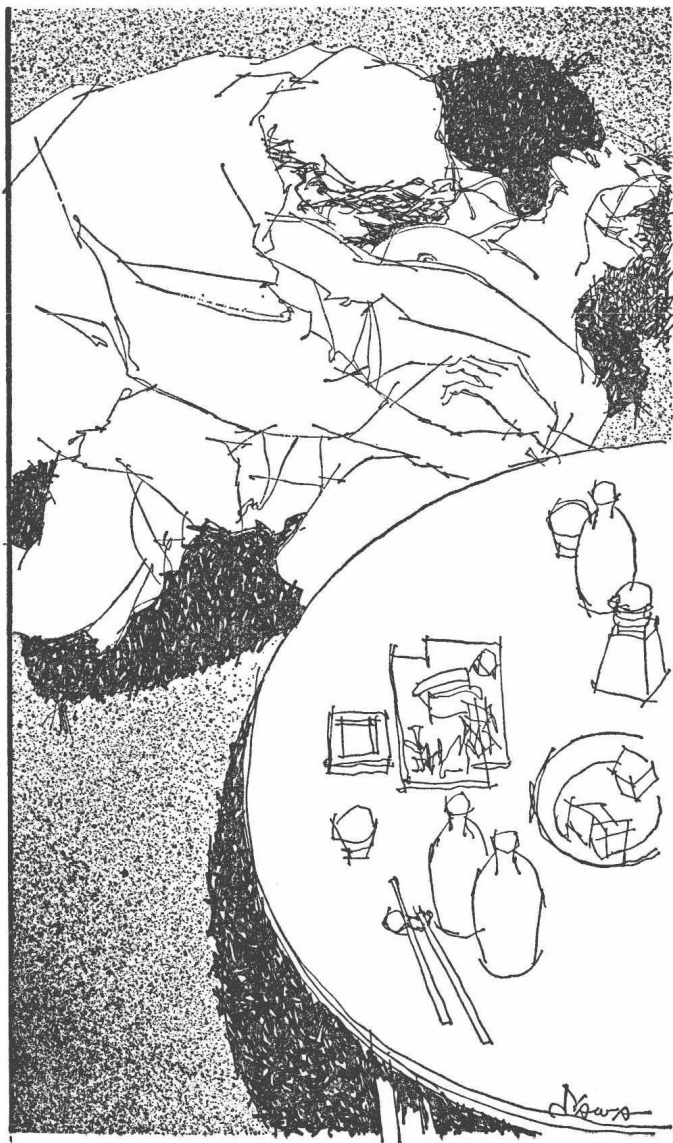
さっきまで散歩する人たちの姿がチラホラと動いていたが、いまはもうどこにも見えない。砂州にひき上げられたプラスチック製の舟の中に、肩を抱き合ってすわっている毛利とゆりの二人の姿だけだ。

海はただ黒々として、美保の関の回転灯台が一定の間隔をおいて光の矢を投げてくると、海上遠く一、二点の漁火がまたたいているだけだった。

「このあたりは、生田春月の『相寄る魂』の舞台になっているところだよ。きみ、読んだことがある？」

毛利に聞かれて、ゆりは首をふった。

「さあ、知りません。うちは子供ころから暮らして追われどおしで、ろくろく本読むひまもなかったです



けん。だけど、その小説家のことなら、お客さんから聞いたことはあります」

「ぼくは子供のころ、姉の本で読んだ。まだ小学生だったな。プラトニック・ラブの小説で、いまみたいなセックス描写なんかみじんもないんだ。筋なんかもうとつくに忘れてしまったが、恋のあわれさ、切なさのようなものだけは、まだ記憶に残っているよ」

「えー？ 小学校のころ？ がいにませとったんですね。先生の子供のころって、どんなですか？ よかったら聞かせてくださいよ」

「その、先生はもうよしてくれよ。毛利さんが他人行儀なら、あんたでいいじゃないか」

「それも、そうですね」

「ぼくの生いたちなんて、簡単なもんさ。四国生まれの東京育ち。きみ同様早くから両親に死に別れ、姉と二人で大きくなった。姉が働いておれを学校にやってくれ、ぼくはそのおかげで美術大学を出て、それからはずっと絵を描いて暮らしてきた。それで全部さ」

「その姉さんは？」

「ぼくのために婚期を逸したのか、それとも本人の意志なのか、まだ独身のオールドミスだね。働いているよ」

「おいくつ？」

「さて……、四十一だったかな？ まあそんなところだ。それよりゆりさん、きみの生いたちのほうがずっと小説的で面白いよ。この前ひととおりは伺ったが、もっと詳しく聞かしてくれないか」

「ちよつとも面白いことはありませんよ。辛いやなことはかりで……」

だが、促されてゆりは話し出した。

島根県八束郡島根町沖泊。ゆりがものごころついてから十四の少女時代まで育ったところだ。半農半漁の部落で小さな入江が漁港になっている。付近には海水の浸蝕でできた「多古の七穴」などがあり、遊覧船や釣船を商売にしている家もある。

父は高畑虎吉、母はシゲ。やはり漁師の家で、畑は家のまわりに少ししかなかった。古い藁ぶきの屋根が大風で吹き散らされないように、すっぽりと廢品の漁網がかぶせてあったのを覚えていた。

舟も貧弱な手漕ぎが一艘だけで、虎吉にはそれにモーターをつける才覚もなかった。部落でも一番貧しいほうで、父がとってくるわずかな魚と、母が作る畑の収穫だけではとても一家三人が食べていけない。ゆりが、小さ

いときから近所の使い走りや、遊覧船の手伝いなどをしてもらう分まで合わせて、どうにか細々と暮らしを立てていた。

ゆりが十四の年だ。段々畑が雪で真っ白になり、暗うつな日本海が白い牙をむいて岬の突端に襲いかかる冬の季節、まず十二指腸かいようで母が死んだ。それから一週間もたないうちに、あとを追うようにして父が死んだ。これは病死ではなく、漁に出て小舟が転覆したのだった。

「ところが、虫が知らせたんか、海で死ぬ三日前に、うちは実の子ではのうて、捨て子を引き取ったんじゃと打ち明けてましてねえ」

と、彼女はいうのである。

「うちはそれまで近所の人の話なんぞで、うすうすおかしいなーとは思ったりしましたが、戸籍謄本を見たこともなかったし……」

「ほう……。しかし、どうしてまたお父さんはそれを？ 十四年間もだまってきたのに」

「さあ、どうしてその気になったんですかねー」

と、あいまいにはぐらかしてしまつたが、実はそれには人に話せないような、いやな理由があつたのだ。ゆり

はそれを、まだ昨日のここのように、生々しく覚えてゐる……。

母が死んで五日め。ゆりは夜中に胸苦しさのあまり目をさました。見ると父が上にのしかかつていた。すでに寝巻ははだけ、両足は押しひろげられて、すんでのころという状態だった。

おとつあんの氣違い、と叫んで抵抗するゆりをもてあました虎吉が、このときはじめて、「そうじゃない、おまえはおれのほんとの子じゃない」と打ち明けた。そしてゆりを引き取って養女にしたいきさつを、めんめんと語つたのだった。

その場は拒み通して済んだが、自分が捨て子だという事実は、ゆりにとっては生まれてはじめての強烈なショックだった。これからどうすればいいのか真剣に悩み考へた。そしてついに家出の決心をした日に、漁に出た父の船が難破した。高波を押して少し沖へ出たところで浸水し、あつというまに転覆したらしいのだ。船体は翌日多古鼻の岩壁に打ちつけられて発見されたが、虎吉の溺死体は三日たつてから、千酌の海岸に流れついたので、駐在所の巡査が発見した。

一人残されたゆりは家と部落を捨てて、米子市に出た。

中学の同級生が市内の病院で働いている。その手引きでゆりも病院に就職した。むろん看護婦でもその助手でもなく、ただの雑役だった。

だが、いままでのひどい貧乏暮らしに慣れたゆりには、どんなに辛い仕事でも平気だった。一定の時間がくれば、あとは自分の自由時間となる。友だちの女の子と一緒に帰ってゆく茶町の下宿は、古く見すばらしいしもたやの二階だったが、ゆりにとっては心のはずむような楽しいねぐらとなった。押しつぶされて陽の目を見ることのなかった彼女の青春が、やっとちっぽけな花を開いた感じだった。

その幸福は、ゆりが十八になり、池田正治に出逢うまでつづいた。

池田はオートバイ事故で足を骨折して入院した患者で、八束郡八束町寺津（大根島）の郵便局員だった。

ちょっとしたきっかけで二人が燃え上がるのは、まるで乾いた枯れ草に火をつけるように造作なかった。いままでうつ屈を強いられてきたゆりの目は、爆発するように外の世界と異性に向いていたし、一方、なすこともない無為の療養生活の中で、たとえ雑役婦ながら白い上っ張りを着たゆりの姿は、池田の目には下っぱ天使ぐらい

には映ったのであろう。

正治が一人息子であり、ときどき島から見舞いに出てくる母親の印象も、どうも氣にくわないと、ゆりの友だちはあやふんだが、ゆりは踏みきった。思ったとおり、身よりのない孤児のゆりを嫁に迎えるのに、正治の母は反対した。が、これは正治が押しきった。

しかし、この結婚はやはり先が見えていたのだ。親子一人という家では、母親はどうしても独占欲の強い女になる。ひょろつとあらわれたこの馬の骨ともしれぬ女に、手塩にかけて育て上げた息子を横どりされたという感じをもつ。そんな家庭がうまくゆくはずがなかった。

母親はゆりを籍に入れないばかりか、ことごとく嫁いびりした。それでも強い夫の庇護があれば耐えていけたかもしれない。だが肝心の正治が、母親にまったく頭が上がらないときている。勝敗ははじめから明らかで、人並み以上に辛抱強いゆりも、この氣の強い初老の女に、そういつまでも対抗することはできなかった。

自分をかばってくれない夫には置き手紙もせず、簡単な身のまわりのものを持って家を出た。

入江から船で松江へ渡ったが、知らぬ町はやはり心細

くて、また米子へまい戻った。

友人にも反対され、病院も困るというのをふり切るようにしてやめた手前、もうもとの職場へは戻れない。だが、頼れるのはやはりその友だちだけで、足は自然に茶町の下宿へ向かった。

一週間ばかり、また以前のように同居生活をしているうちに、ゆりはあることを思い出した。病院で働いているとき、やはり入院患者の一人で、「あんたほどのべっぴんさんが、こげな病院の下働きじゃもったいなか。わしが紹介してやるけん、皆生温泉で働きんさい。月に十五万は固かよ」とすすめたおっさんがあったのだ。「ストリップですか」と聞くと、手をふって、「いやいや、そこまでやらんでもよか。旅館かバーづとめでええのよ」といった。

そのときは聞き流しにしていたが、女の一人暮らしに堅い仕事でかつかつ食っていても、先ののぞみはない。結婚に失敗したいまは、やはり少しは体を張るような仕事であっても、かせいで金を貯めることだ。そうすれば将来、小さな飲み屋か食堂ぐらいは持てるようになるかもしれない。男に縋^{すが}るだけしか知らない女の生き方なんて、もうたくさんだと腹をきめた。

そうときまると、女は強い。しかもゆりには苦勞に耐える根性と、水商売の女に不可欠な楽天性と、それにまあああの顔と体がある。皆生温泉の歓楽街は、よろこんで彼女を迎えてくれたのだった。

養父に犯されかけたところだけを除いて、彼女の身の上話が終わると、

「いや、まあまあぐらいじゃない。きみはかなり美人だよ。それに体もいい。尻っぺたにあるホクロまで、ぼくはすっかり気に入ったぞ」

と、毛利がほめた。

「いやですよ、毛利さん。もう、そげなとこまで見つけたとですか」ゆりは彼の肩を一つどやしておいて、「まあそんなとこですよ、うちの身の上話。あとは最初の晩に申しましたとおりのいきさつで……。どうですか、つまらんかったでしょうが」

「ちがうね。ぼくには大いに興味があつた。ある女の一生、いや半生としてね。その話が、いま描きかけの沖泊風景にも、影響を与えるかもしれない」

「まあ、うれしがらせのうまいこと。だけどもうこれから先は年をとるばかり……。どうせこげな調子で細々と